

絶滅危ぐのチョウ

ウスイロヒョウモンモドキ

美方町新屋の高丸山周辺(ハチ高原)で、県がブナやナラなどを植栽して整備した場所に、絶滅の恐れのあるチョウ「ウスイロヒョウモンモドキ」が生息していることが分かった。県では、ハチ高原一帯がこのチョウの生息地としては最北東端にあたることを重視。関係町に呼び掛けて保護対策について話し合い、チョウの保護・育成に向けて取り組みを進めていくことを決めた。

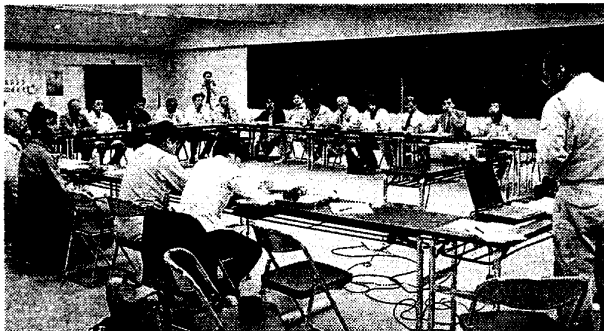


絶滅の危機にひんしているウスイロヒョウモンモドキ。兵庫昆虫同好会会員・立岩幸雄さん提供

ハチ高原に生息確認

県、保護対策実施へ

ウスイロヒョウモンモドキは、タテハチョウ科のチョウで、前翅(し)の長さが約二・五センチ。草原に生息し、六月下旬から七月上旬にかけて産卵する。幼虫時はオミナエシを食べる。人間の生活形態の移り変わりに伴って、各地から草原が姿を消す中、一九八〇年代以降に急減した。現在、鳥取や島根、岡山など中国山地の数カ所に生息しているのみとなり、環境省レッドデータブックの絶滅危ぐⅠ類に指定されており、県版レッドデータブックでもAランクに入っている。



ウスイロヒョウモンモドキの保護・育成について協議する関係町の住民ら

チ高原周辺は、生息地の最北東端と言われ、チョウの採集家には知られている場所。成育環境が限られていることや移動距離が短いため、採集によって絶滅する可能性が高いチョウとされていることから、一帯を整備した県治山課では当面の保護対策を実施。植栽したブナなどの生育を促すために、二〇一三年まで二年計画していた草刈りを本年度はこのチョウの成長に考慮し、年一回にとどめる措置をとった。

県では、整備した森林の有効活用とともに、抜本的なチョウの保護と育成に乗り出すことを検討。同高原がまたがる美方町、村岡町、関宮町の三町の住民らに呼びかけ、関宮町丹戸の交流促進センターで今後の方向性などについて協議した。

協議には美方、村岡、関宮三町の住民やスキー場関係者、各行政機関から三十三人が出席。同周辺のウスイロヒョウモンモドキを調査した岐阜県立森林文化アカデミーの中村康弘助手と宮崎由佳助手からチョウの生息と現状について説明を受けた。この中で、中村助手らは「ハチ高原は豊かな草原環境にある。ウスイロヒョウモンモドキをシンボルとした環境保全を考えては」と提案。その上で、「(チョウの)存在を『隠す』のではなく、全国に発信し、採集禁止の措置をとることや草原の適切な維持管理が必要である」と説明した。

この日の協議では、出席者から関宮町側に地元住民の協力で採集禁止の看板を設置したことや生息地公表の是非、保護・育成の方法など、さまざまな意見、質問が相次いだ。最終的に今後も県と三町の関係者らが話し合いの場を持ち、保護・育成に向けて取り組んでいくことを決めた。